

石川県立図書館“川口文庫”所蔵の往来物資料

Investigation report on "OURAIMONO" documents of Ishikawa Prefectural Library possession: Survey of bibliographies in the Dr.Kawaguchi's collection of books

郡 千寿子*

Chizuko KOHRI*

要 旨

石川県立図書館の川口文庫に所蔵されている近世期版本の往来物資料について、書誌的な調査結果を含め、紹介する。石川県立図書館には、〈森田文庫〉〈饒石（にぎし）文庫〉〈李花亭文庫〉〈川口文庫〉といった特殊文庫があり、所蔵往来物資料の調査結果については、すでに公表¹⁾している。本稿では、〈川口文庫〉所蔵の23本に焦点をあてて、画像を含め報告する。目的別に分類すると、教訓科往来0本、社会科往来2本、語彙科往来1本、消息科往来16本、地理科往来1本、歴史科往来3本、産業科往来、理数科往来、女子用往来は0本という結果であり、消息科往来の割合が大きかった。出版地域別では、京都が8本、江戸が7本、大坂が1本、不明が7本という結果であり、京都大坂を合わせた関西圏での出版が、江戸より若干上回るという傾向がみられた。

特殊文庫においては、本稿で紹介する〈川口文庫〉を含めて、総計34本の近世期版本往来物資料が確認できた。北陸地域という枠組みでみれば、新潟県立図書館所蔵の往来物資料は、江戸文化圏からの流入が多いという傾向がみられたが、石川県立図書館では、関西圏と江戸での差異がそれほど顕著でないことが明らかとなった。

往来物の分布を通して、地域の教育的背景の格差や文化伝播状況などを解明することを目的としているが、本稿は、他地域の状況と比較する上での基盤となる調査の一報であるといえよう。

キーワード：北陸、川口文庫、往来物、言語生活、地域文化

1. 研究の背景と調査方法について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究²⁾をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のものが出版された。従来の往来物研究は、教育史資料という側面からなされてきたが、日本社会の近代化や人間文化形成に果たした役割や影響など、多くの未開拓課題が存在し、新たな視点からの活用が期待されている。

しかし、文献資料の基礎的研究をはじめとして、発掘も十分にすすんでいない現状にあり、そうした事情を背景に、東北地域の往来物資料についての調査研

究³⁾をすすめてきた。現在、東北地域と海域でつながり、近世期に関西とも文化交流など関係が深かったと予測される、北陸地域にも調査対象を拡げている。地域間格差や文化伝播事情など研究の進展を目指し、富山⁴⁾、新潟の調査報告⁵⁾に加えて、石川県立図書館の特殊文庫所蔵資料について調査¹⁾したが、本稿では〈川口文庫〉の往来物資料に焦点を絞って紹介する。

従来の調査方法を踏襲し、写本は除き、版本に限って成立時期や出版元を確認した。調査対象の資料それぞれについて、目的別にも分類整理⁶⁾し、文献資料の所在や記載内容については、『国書総目録』⁷⁾『古典籍総合目録』⁸⁾および『往来物解題辞典』⁶⁾によっても検討している。

*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

2. 山口文庫¹⁾について

平安朝漢文学研究の第一人者として知られている、故川口久雄博士の愛蔵書が寄贈され、川口文庫として整備されたものである。図書約1万3千冊と学術雑誌約130種4千冊余りの膨大なコレクションであり、川口博士が集積された貴重な資料が多数所蔵されている。特に貴重なものとして、菅原道真の詩文集『菅家文庫・菅家後集』や大江匡衡の漢詩集『江吏部集』、中世末期の古写本『和漢朗詠集私注』等が収められている。

往来物資料について調査した結果、〈川口文庫〉には23本の近世期版本往来物資料の所蔵が確認できた。それらを目的別、出版地域別に分類すると、目的別では、教訓科往来0本、社会科往来2本、語彙科往来1本、消息科往来16本、地理科往来1本、歴史科往来3本、産業科往来、理科科往来、女子用往来は0本という結果であり、消息科往来が多数を占めていることが知られた。出版地域別では、京都が8本、江戸が7本、大坂が1本、不明が7本という結果であり、京都大坂という関西圏が江戸を若干上回るという結果であった。

3. 資料紹介

分類番号1535の『御成敗式目』は、社会科往来資料である。全30丁。表紙は、茶色。大きさは、縦27.0cm、横18.0cm。表紙裏部分に「直到」と持ち主らしい署名がある。直書きで朱で「貞永式目 全」と外題がある。内題として、1丁表一行目に「御成敗式目 貞永元年八月十日」とあり、表紙の朱書き外題が当初からのものかは不明である。表紙は文献和装本成立時のままと見受けられる。

「御成敗式目」は異称として「貞永式目」「関東式目」等とも称され、刊本の大半が大本一冊である。鎌倉幕府の基本法典で、頼朝依頼の慣習法や判例などに基づいて御家人の権限・義務、所領の訴訟等について成文化したものであるが、政治・行政の規範として古来より尊重研究され、特に武家社会においては、必須の教養とされた。中世より読み書きの手本に多用され、鎌倉中期写本だけで20種以上あり、注釈書も多種存在している。慶長（1596～1614）板は近世に夥しく流布した刊本の源流となり、近世以降は、手習い用にも広く用いられ、手本・読本用で190種のほか、「清原宣賢式目鈔」（古活字版）ほか注釈書も多数刊行され

ている。

分類番号1536の『御成敗式目 下』は、全26丁。表紙は紺色。題箋はなく、大きさは、縦26.2cm、横18.4cm。1丁表一行目に「御成敗式目下」とあり、上下本のうちの下巻と判明するが一冊のみ所在している。柱書には「式目鈔下」と丁数の記載がある。本文に加えて、小さい書体（割注）で説明文を有している。26丁裏に「寛政七年卯初春 平安書林 著屋儀兵衛求板」とあり、寛政7年（1796）の刊行年と京都の出版と知られる。

分類番号1550の『自遣往来』は、地理科往来資料である。表紙は、薄い青色。35丁。破損激しく、綴じ糸も外れている。1丁表1行目に「自遣往来」と振り仮名「じけんわうらい」とある。35丁裏に本文が終わった後、4行目下に小さく「須原屋与兵衛板」とある。大きさは、縦26.0cm、横18.0cm。「自遣往来」は、「江戸往来」とも称され、年始の挨拶や儀式、行事の有様、諸国より流入する土産、菓肴、衣服、器財、江戸の広さおよび町々の方角と武家民家の様子、明暦年中（1655～58）に玉川の水を東南の地に引いたことや、万治年中（1658～61）に隅田川に両国橋をかけたこと、不忍池遊興の状況を序して御代の泰平を謳歌する内容のものである。このように江戸の案内書も兼ねており、「自遣往来」「江戸往来」と称されている。

分類番号1551の『消息往来』【画像①】は、消息科往来の代表的な資料である。表紙は茶色で文様入りの紙料である。大きさは、縦22.0cm、横15.4cm。全20。1丁表部分は破損して失われている。1丁裏と2丁表が見開きで「十二月異名」の「一月」～「八月」、2丁裏に「九月」～「十二月」が絵入りで記載されている。3丁表1行目に「消息往来」とあり、上下段の二段組みで上段には絵が記されている。裏表紙裏部分の最終に「天保十四年卯晩秋発版 京都寺町通松原上ル町 諸書物仕入所 菊屋七郎兵衛」とあり、天保14年（1845）、京都の出版であることが知られる。また「商売往来 寺子教訓書」「世話千字文」「番匠往来」等、扱っている書物名が列挙されている。「諸織往来 全」には小さい文字で「士農工商之諸織常に入用也。初童より読習すべき書也。」と補注があり、書物についての説明や宣伝も記載されている。

分類番号1552～1554は、『新撰類聚往来 上中下巻』の三冊一組の消息科往来資料である。上巻は、全42丁。中巻は、全43丁。下巻は、全33丁。表紙はなく、破損が激しい。綴じ糸もすでになく、三冊一緒にひとつで仮綴じされ、保管されている状態である。「柱書」

には「類従上」「類従中」「類従下」と丁数の記載が確認できる。大きさは、表紙でなく本文用紙で、縦26.4cm、横20.0cm。簡易な仮表紙に「慶安元年版 新撰類聚往来 全三巻」とあるが、板年は確認できない。一般に古往来を称されるもので、慶安元年刊本は大本三巻三冊（後に三巻合一冊）である。そのため本資料もそれに該当すると推測され、仮表紙に記されたものと思われる。手紙文より構成され、各状に膨大な類別単語集団を盛り込んでいる。

分類番号1555の『庭訓往来』も消息科往来資料である。表紙は紺色で当初のものと見受けられる。題箋はあるが後書きらしい「尊円」の文字のみ判読できる。1丁目表冒頭に内題「庭訓往来」とある。全73丁。大きさは、縦28.0cm、横18.0cm。

分類番号1556の『庭訓往来』は、表紙は青色で当初のものと見受けられる。題箋はあり、外題は「新板庭訓往来」。内題は、1丁表冒頭一行目に「庭訓往来」、振り仮名は「ていきんのわうらい」とある。表紙裏部分に「文政八 乙酉年九月」との書き入れがあり、文政8年（1825）刊行。全60丁。最終の60丁表に本文が終わった後、小さな文字にて「京都本開板」とあり、京都の出版とした。大きさは、縦25.0cm、横18.0cm。

分類番号1557の『庭訓往来捷註』【画像②】は、「平丘先生著」とあり、庭訓往来の注釈である。表紙は、薄い青色で、当初のものと思われる。題箋もあり、外題に「訂誤 庭訓往来捷註 全」で、内題は、2丁表一行目に「庭訓往来捷註」とある。大きさは、縦26.6cm、横18.4cm。全104丁。1丁表に「題捷註」「頃著兵丘先生口授の勞を厭ひ捷註を撰して家童に授。」と本書の趣旨を「江都駒籠隠士 鳥有齋」が記述している。1丁裏には「凡例」も示され、二段でわかりやす

く割付にも工夫がみられる。最終丁104丁表に「寛政十二庚申秋七月」「江都書肆 江戸大傳馬町二丁目 大和田安兵衛 同麴町十丁目 角丸屋甚助 梓行」とあり、寛政12年（1801）、江戸の出版であることが知られる。

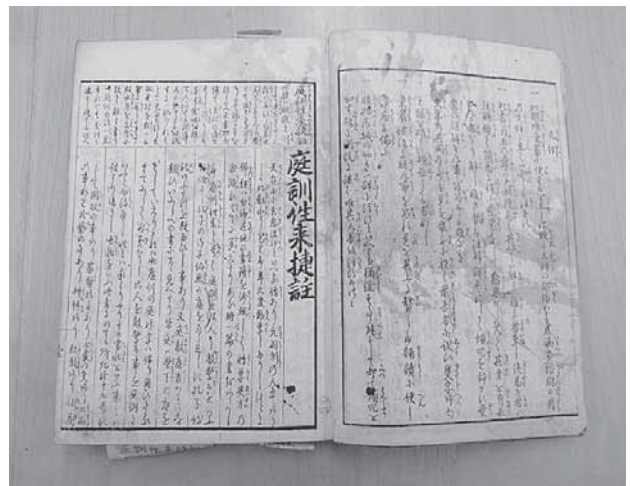
分類番号1558の『庭訓往来証注大成』【画像③】も、庭訓往来の注釈書である。「永井如瓶子編」とある。表紙は、濃緑灰色で文様入り。題箋はあるが破損して文字は一部しか判読できない。内題として、表紙裏部分の中央に「庭訓往来証注大成 全」とある。左下に「江都書肆 栄久堂発行」と見える。序に続いて一丁が始まるが、上下二段組で、上には絵が描かれ、下段に本文と説明が記載される体裁である。柱書に「庭訓証注」と丁数が記され、序文が1丁あり、本文86丁で全87丁である。

裏表紙裏部に「東都書肆」と「日本橋通壱丁目 須原屋茂兵衛」「浅草茅町貳丁目 同伊八」「日本橋通貳丁目 山城屋佐兵衛」「同所 小林新兵衛」等全12軒の書肆が列挙されている。大きさは、縦25.8cm、横18.0cm。

分類番号1560の『庭訓往来精注鈔』【画像④】も、庭訓往来の注釈書である。表紙は、薄い青色で模様入り。題箋があり、外題は「頭書訓読 庭訓往来精注鈔 全」。表紙裏部分に右上に「弘化新刻」中央に「庭訓往来精注鈔」左に「東都書林 錦森堂梓」とある。柱書に「庭訓往来精注鈔」と丁数の記載がある。全118丁。裏表紙裏に「江戸馬喰町二丁目 東都書林 森屋治郎兵衛板」とあり、江戸の出版であることが知られる。1丁表から、二段組で、頭書には絵が挿入されている。大きさは縦18.4cm、横13.0cm。「弘化新刻」とあり、1844～48年頃の刊行と推測されるが、天保14



【画像①】1551『消息往来』（表紙裏・1丁表）



【画像②】1557『庭訓往来捷註』（1丁裏・2丁表）

年（1843）『頭書訓読庭訓往来精注鈔』をほぼ踏襲して頭書に挿絵を加えた改竄本である。

分類番号1561の『庭訓往来註 上中下』も、庭訓往来の注釈書である。表紙は、濃茶色で成立当初のままで見受けられる。題箋はない。直書きで表紙に「庭訓往来抄 上中下」と墨書きされているが、後の補筆とみられる。1丁表に「庭訓往来序」、2丁表に「庭訓往来 註上」と始まる。柱書は「庭訓抄 卷上」「庭訓抄 卷中」「庭訓抄 卷下」と丁数が記されている。「卷上」は、「一」～「五十四」、「卷中」は、「一」～「三十一」、「卷下」は、「一」～「四十一」であり、合計の丁数は127丁。最終丁巻下の41丁表に「此来庭訓抄雖行于世文字錯乱而理義難通仍訂正於旧本以重鎮干新梓焉云 慶安二己丑歳中陽吉辰 二條通松屋町 山屋治右衛門刊行」とある。慶安2年（1650）年、京都の「山屋治右衛門」が刊行したものと知られる。大きさは、縦27.0cm、横18.0cm。

大本三巻三冊本も存在しているが、本調査資料の慶安二年本は、一冊に合冊されている。「庭訓」の各状とも、12～13段に分けて、大字・八行・付訓、返り点・送り仮名付きで記し、段ごとに漢字・平仮名交じり文による詳細な割注を施す。寛永8年（1631）刊を起源として継承されたものらしい。上中下の三巻仕立てにしている点、文字のすべてを行書体で記した点、仮名をすべて平仮名に統一した点に特徴があり、後世の庭訓往来の注釈書に及ぼした影響は大きいとされる。

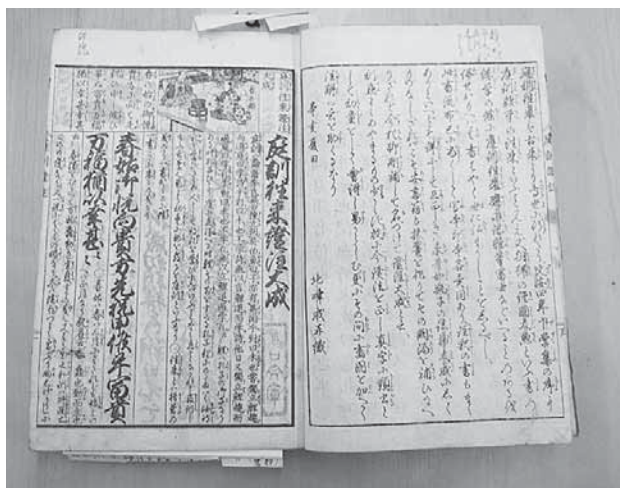
分類番号1562の『庭訓往来註 上巻』と1563の『庭訓往来註 下巻』は、二巻で一組の資料である。表紙は、青色で成立当時のものと見受けられる。題箋があり、外題は「庭訓抄上」と判読できる。下巻の方は、

題箋がなく、朱書きで直書きの「庭訓抄 下」とある。朱書きは後の川口博士による補筆であると思われる。下巻の裏表紙裏に朱書きで「新板 庭訓抄 ト題箋アリ 昭和戊寅仲呂 南風子 川口印」とあり、表紙の字体や朱が同様であるとみられるため、同一人による書き入れと判断できる。本文に割注があり、また付訓もある。上巻表紙裏部分にも興味深い墨書きがあり、「尾洲中嶋郡苅安賀村此市場 正福寺 常住物」と元の持ち主と思われる墨書きが確認できる。

柱書は「庭訓抄 卷上」「庭訓抄 卷下」と丁数の記載がある。上巻は、全32丁、下巻は、全41丁。大きさは、縦27.4cm、横18.8cm。下巻の最終丁、41丁裏に版元の記載「承応乙未仲春吉旦 寺町誓願寺前 西村又左衛門重新板」があり、「承応乙未」承応4年（1656）、京都の西村又左衛門が刊行したものであることが知られる。

分類番号1564の『庭訓往来萬歳蔵』も、庭訓往来の注釈書であるが、「慶応」に作成された比較的新しいものである。表紙は薄い青色で成立当時のものと見受けられ、保存状態は良好である。題箋があり、「庭訓往来萬歳蔵 全」、小さく「誤訂正」「重宝萬徳」とある。もとの綴じ糸の補修のためか、残存は紙縫りで綴じられている。大きさは、縦25.4cm、横17.4cm。柱書は「庭訓」と丁数が記載。全45丁。表紙裏は文章と絵が記される。1丁表から本文で「庭訓往来」の漢字右側に「ていきんわうらい」と振り仮名がある。漢字を中心に平仮名で振り仮名が付訓された体裁である。

裏表紙裏に「弘化四丁未年再板 安政三丙辰年再板 慶応三卯九月再板」とあり、版を重ねたものであることが確認できる。「書林 江戸馬喰町二丁目 錦森堂 森屋治兵衛板」とあり、江戸の出版である。



【画像③】1558『庭訓往来証注大成』（1丁裏2丁表）



【画像④】1560『庭訓往来精注鈔』（表紙）

分類番号1565の『庭訓抄 上巻』と1566の『庭訓抄 下巻』は、二巻で一組の資料である。表紙は、紺色で成立当時のものと見受けられる。綴じ糸がはずれ破損もみられ、題箋は、上下巻残存しているが、文字の判読は一部のみできる状態である。大きさは、縦25.4cm、横18.6cm。上巻の題箋からは、一部の文字「庭」「抄」「上」が判別できる。下巻は、「庭訓往来抄 下」と判読できる。

上巻1丁目は序で、本文は2丁から始まる。漢字とカタカナ交じり文で、すべての文字の大きさが同様で半丁（一頁）に13行の体裁である。柱に「庭訓抄上」「庭訓抄 下」と丁数が記載。上巻は、全37丁。下巻は、全30丁。下巻最終丁30丁裏の最終行に「貞享五戌辰年九月吉日 川勝五郎右衛門版」とある。本資料は、『往来物解題辞典』に記載がない。割注でない本文と注が同様の書体で、本文に割注がなく、付訓も全くないのが特徴的で、大きさも大本より若干小さく形状も体裁もほかの庭訓往来抄とは違っている。

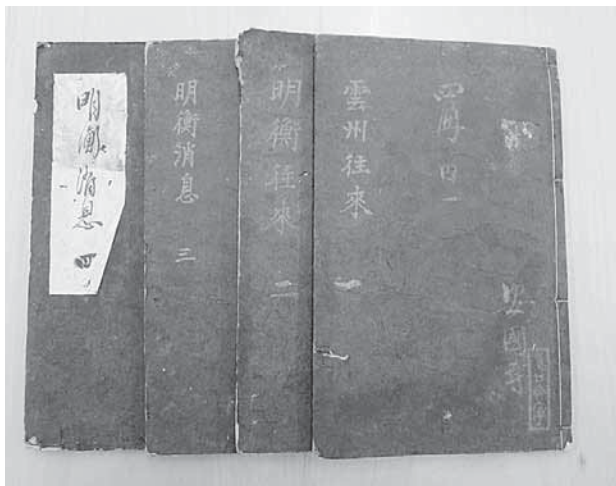
分類番号1567の『風月往来』は、消息往来資料である。出版を示す記載はない。表紙はなく、本文と同様の料紙で紙縫りの和紙で簡易に綴じられている。当初からこの形態であったかは判断できない。柱書にも囲いなどなく書体のみで「風月」と「一」～「十」の丁数が記載。全10丁。大きさは、縦25.6cm、横18.0cm。1丁表1行目に「風月往来」と始まり、半丁（一頁）に6行の漢字で本文があり、「新春」の漢字右に小さく振り仮名がカタカナで「シンシユン」、「慶賀」の漢字右に小さく振り仮名がカタカナで「ケイガ」、時には送り仮名や返り点も付訓されている。

分類番号1568の『風月往来』は、題名が同じであるが、1567とは全く別の資料である。表紙もあり、本

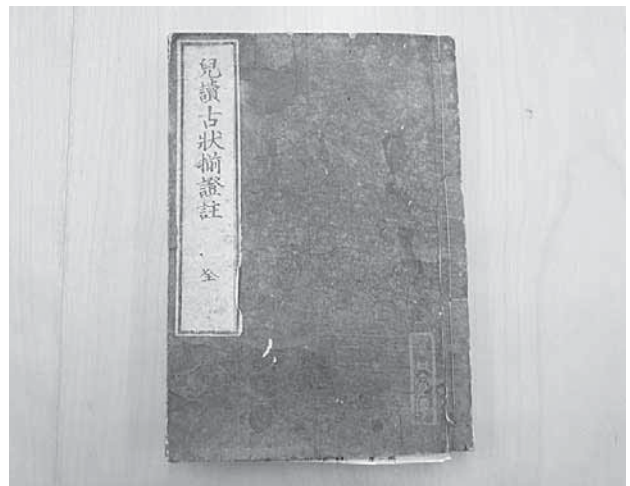
文漢字の右横すべてに平仮名で付訓されているほか、大きさもかなり相違している。柱書は囲み線があり、「風月」と丁数が記載。全8丁。表紙は青色で成立当時のものと思われる。題箋はない。内題として1丁表1行目中央に他の文字より少し大きく「風月往来」とある。表紙裏に干支十二が絵とともに漢字振り仮名付きで示されている。「京都華町四条下ル町 葉山堂板」と記載があり、最終丁8丁表最終行に「京都松原通ふや町東入 本屋吉兵衛板」とあり、京都出版が確認できる。大きさは、縦20.8cm、横15.0cm。

分類番号1569の『本朝三字経』は、歴史科往来資料である。表紙は、白色。題箋に「本朝三字経 全」と記載がある。大きさは、縦22.0cm。横15.0cm。表紙裏に「正齋先生書 本朝三字経 肅秋口蔵板」、1丁表～2丁表は「本朝三字経 序」で本文は3丁から始まる。2丁表序の最後に「安政戊午正月良齋安積信撰」とある。安政5年の刊行であるが、出版地は不明。異称として「皇国三字経」ともいう。初板本をはじめ多くが半紙本一冊。王伯厚作「三字経」形式で日本歴史のあらましをつづった往来資料である。「我日本、一称和」ではじまる三言一五四句の文章で、神武天皇より豊臣氏の滅亡に至る歴史を記す。特に各時代の代表的人物を列举して、政権と文明との推移を簡潔に記述し、末尾でこれら栄枯盛衰の歴史から学ぶべき教訓をまとめる。数種の板種が存するが、寛永6年初版本は、本文を楷書、大字、四行、無訓で記している。

分類番号1570の『明衡往来 一～三』は、消息科往来資料である。表紙は、薄い青緑色である。当初からのものと見受けられる。柱書は丁数のみであり、「上一」～「上五二終」、「中一」～「中二七終」、「下一」～「下二七終」と記載。上中下の三巻で一冊。本文は



【画像⑤】1571～1574『明衡往来一～四』（表紙）



【画像⑥】2353『児讀古状摘證註』（表紙）

106丁であるが、最終丁は、書誌の「書林女川文栄堂の蔵書目」「大阪博労町心齋橋通角 伊丹屋善兵衛版」の目録と宣伝がなされている。したがって、全107丁となる。出版地は大坂。

注目すべきは、書誌が販売の際、書物を包んでいたとみられる紙袋（厳密には袋状になっておらず、半紙用の長い料紙で包む形式）が残存していることである。「慈円親王真筆 當用消息 明衡往来 全 浪華書肆 前川文栄堂」と書店の押印も確認できる。

外題は「當用消息 明衡往来 全」で、1丁表1行目「明衡消息卷上」と始まるが外題と内題が不一致である。大きさは、縦25.4cm、横19.0cm。厚みが2.0cm。袋の大きさ（表裏）は、縦25.4cm、横21.4cm。ちょうど縦横厚みを足した書物を包む形状の袋の大きさであり、当時の本のやりとりがこのような形で行われていたことが推測でき、ひとつひとつこのような袋で包まれて流通していたのであろう。

分類番号1571～1574の『明衡往来一～四』【画像⑤】は、1巻は28丁、2巻（上）は、23丁、3巻（下）は25丁、4巻（下）は25丁の四巻一組の資料である。表紙は、黒色で題箋はない。朱書きで外題として直書きされている。「雲州往来 一」は、柱書は「明衡 上」「一」～「二十八終」である。「雲州往来 二」は、柱書は、「明衡 上」「二十九」～「五十一」である。「雲州往来 三」は、柱書は、「明衡 下」「一」～「二十五」、「明衡消息 四」は、柱書は、「明衡 下」「二十六」～「五十」である。

朱書きで表紙に「安国寺」の文字も見える。二巻の表紙裏に「安国寺蔵書 不出於山門」とある。四巻の最終丁裏に「寛永壬午仲秋交日 西村又左衛門板行」とあり、寛永19年（1642）、京都で刊行されたことが知られる。古往来であり、大きさは、縦28.0cm、横17.4cm。異称として「雲州往来」とも呼ばれ、外題と内題の相違も異称からの影響と推測できる。

分類番号1575の『明衡往来 上下巻』は、箱入りのもので上下巻として所蔵されているが、別の種の「明衡往来 上巻」「明衡消息 合巻」がひとつの箱に収納されているものである。薄い青色の表紙の資料は、題箋に「明衡消息 合巻」とあり、上下巻が一冊になったものである。1丁表1行目「明衡消息卷上」「上啓 案内事」で始まり、最終丁は、「明衡消息卷下」で完結している。柱書は「明衡 上」「一」～「五十」、52丁目1行目は「明衡消息卷三」とある。ここから柱書は、「明衡 下」「一」～「四十八」である。全98丁の一冊本。大きさは、縦26.5cm、横17.0

cm。最終丁裏に「寛永壬午仲交日 西村又左衛門板行」とある。

分類番号1576の『明衡消息 上巻』は、表紙破損し、上巻のみで下巻はない。消息の手習い用と思われる。出版などの記載もない。これは上巻のみで終わっており、下巻は見当たらない。紛失したか川口博士が手にした際にすでに上巻のみのものだったかは不明である。大きさは、縦26.8cm、横18.6cm。1丁表「明衡消息卷上」で始まっている。柱書は、「上」「一」～「三十五」である。36丁目表1行目が「明衡消息卷二」で始まる。柱書はここからまた「上二」「一」～「二十八」である。全63丁。上の一巻二巻であることが知られる。本文も「上啓 案内事」で始まり、最終丁は「口時 右中弁」「明衡消息卷上」となっている。漢字だけの体裁で、朱書きで振り仮名や注が補足されているが、これは後の書き入れである。次の紙料とは全く本文の体裁も違っている。

分類番号2353の『児読古状揃証註』【画像⑥】は、表紙は、紺色で、成立当時のものと推定される。題箋はあり、外題「児読古状揃証註 全」とある。柱書は丁数のみ「一」～「五十九」、序が1丁、「蔵版目録」が1丁あり、全61丁になる。裏表紙裏に「三都書物問屋」とあり、「京都寺町通松原下ル町 勝村治右衛門」「大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛」「江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛」ほか7軒、計10軒の書肆が列挙されている。表紙裏に「高井蘭山翁講釈 児読古状揃証註 東都書林 玉巖堂梓」とあり、江戸の出版として整理した。大きさは、縦25.6cm、横18.0cm。

分類番号2354の『児読古城揃証註』は、表紙は、青色で題箋はない。破損している。大きさは、縦25.6cm、横18.0cm。分類番号2353の資料と表紙裏部分は同じ記載である。柱書も丁数のみで同様である。ただし、裏表紙裏部分は相違している。「実語教童子教」等の本の宣伝に加え、「天保十年巳亥仲冬」「東都書林」7軒が列挙されている。「朝倉茅町二丁目 須原屋伊八」「両国吉川町 山田佐助」等と見える。

4. まとめにかえて

本稿では、石川県立図書館の特殊文庫のひとつである〈川口文庫〉所蔵の往来物資料について、書誌的特徴とともに資料を紹介してきた。〈川口文庫〉には23本の近世期版本往来物資料の所蔵が確認でき、目的別では、教訓科往来0本、社会科往来2本、語彙科往来1本、消息科往来16本、地理科往来1本、歴史科往

来3本、産業科往来、理数科往来、女子用往来は0本という結果であり、消息科往来が多数を占めていることが知られた。出版地域別では、京都が8本、江戸が7本、大坂が1本、不明が7本という結果であり、京都大坂という関西圏が江戸を若干上回るという結果であった。

石川県立図書館の〈森田文庫〉〈饒石（にぎし）文庫〉〈李花亭文庫〉〈川口文庫〉といった特殊文庫における、近世期往来物資料の調査結果は、総数では、34本であった。それらを分類整理すると、目的別では、教訓科往来3本、社会科往来3本、語彙科往来2本、消息科往来20本、地理科往来1本、歴史科往来4本、産業科往来0本、理数科往来1本、女子用往来0本という結果であり、消息科往来の割合が多いという偏在が明らかとなった。出版地域別の分類では、江戸11本、京都9本、大坂4本で、不明が10本という結果であった。

北前船の寄港地である秋田や酒田の往来物資料は、圧倒的に京都と大坂の出版が多く、関西圏から海路で運ばれたと考えられた。他方、新潟では江戸からもたらされたものが多く、陸路の比重が高いようであった。石川県立図書館所蔵の資料は、総数としては多くないが、それらに限って言えば、江戸11本に比して、京都と大坂を合わせると13本であり、関西圏からのものと江戸が僅差であるといえるだろう。

往来物の分布を通して、地域の教育的背景の格差⁹⁾や文化伝播状況などを解明することを目的としているが、本稿は、他地域の状況と比較する上での基盤となる調査の一報となると思われる。

注

- 1) 拙稿「石川県立図書館所蔵の往来物資料について―特殊文庫における調査報告―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第122号、2019年10月）参照。『森田文庫目録』（石川県立図書館、1994年）、『にぎし文庫目録』（石川県立図書館、1991年）、『李花文庫目録』（石川県立図書館、1980年）、『川口文庫目録』（石川県立図書館、1997年）等参照。
- 2) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について―関西文化との関係から―」（『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第1輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月）、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考―近世期の京都観―」（『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月）、拙稿「往来物の「女ことば」について」（『関西文化研究叢書 10巻』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、

2008年11月）、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について―東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月）、拙稿「国語資料としての『都花月名所』―江戸時代後期における漢字表記と振り仮名―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月）、拙稿「『南都名所記』についての一考察―山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月）等参照。

- 3) 拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月）、拙稿「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月）、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月）、拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料―目的と出版地からの分類分析―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月）、拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料―目的別分類からの考察―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月）、拙稿「山形における江戸時代の書籍流通について―往来物資料の出版地域からの検討―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月）、拙稿「秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察―弘前・酒田・山形との比較検討―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第111号、2014年3月）等参照。
- 4) 拙稿「富山県立公文書館所蔵の往来物資料について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第114号、2015年10月）、拙稿「高岡市立中央図書館所蔵の往来物資料について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第115号、2016年3月）参照。
- 5) 拙稿「長岡市立中央図書館文書資料室所蔵の往来物―横山家文書からの報告―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第118号、2017年10月）、拙稿「新潟長岡「斯道館資料」の往来物について」（『弘前大学教育学部研究紀要』第119号、2018年3月）、拙稿「新潟県立図書館所蔵の往来物資料について―目的別分類の観点から―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第120号、2018年10月）、拙稿「新潟県立図書館所蔵の往来物資料について―出版地域別の観点から―」（『弘前大学教育学部研究紀要』第121号、2019年3月）参照。
- 6) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』（雄松堂、1988年）、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』（大空社、2001年）、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 図版編』（大空社、2001年）を参考とした。
- 7) 『国書総目録 第1～9巻』（岩波書店、1963～1976年）参照。
- 8) 『古典籍総合目録 第1～3巻』（岩波書店、1990年）参照。
- 9) 長友千代治著『江戸時代の図書流通』（思文閣出版、2002年）、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』（平凡社、2007年）、市川寛明・石山秀和著『江戸の学び』（河出書房新社、2006年）等参照。鈴木俊幸氏のご研究によ

れば「寛政期（1789～1801）を境にして、知と情報のありようが大きく変化していくように思われる。」（『江戸時代の読書熱』（平凡社、2007年）17頁参照）という。

【付記】

貴重な文献資料の閲覧や撮影、ならびに掲載許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、石川県立図書館の関係者各位に心より感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI（基盤研究（C）課題番号15K02555）の助成を受けた研究成果の一部です。

（2019. 12. 16 受理）